

師走の候 宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部の皆様には益々ご清福の段、大慶に存じます。

さて月日の経つのは早いもので、平成28年も後1ヶ月を残すのみとなりましたが、改めて宮崎支部への今年一年間に亘る皆様のご支援に感謝申し上げる次第です。

先月の自衛隊関連行事は11/22に空挺同志会主催で川南町のホテル竹之屋にて開催された前夜祭に参加致しました。現空挺団長で延岡出身の児玉陸将補を始め、川南町長や同町経済界有志にも多数ご臨席を賜り、大いに懇親を深めた処です。

翌23日の川南護国神社慰霊祭に全国空挺同志会の支部長等が列席する関係上「前夜祭」と呼ばれ、川南町ではビッグイベントの一つと位置付けられています。

川南町は陸軍落下傘部隊発祥の地と云う縁で、例年第一空挺団より団長や選抜された約20名の同町出身の隊員にご参加を頂き、慰霊祭にウイングマークを佩用した精強な空挺隊員が列席すれば、英霊の歓声が漏れ伝わってくると云うものです。

43連隊隊員による国旗掲揚と喇叭吹奏に始まるこの慰霊祭は丸2時間にも及び、色々な護国神社の中では私の知る限りに於いて最も盛大且つ厳粛な式典かと思われまますので、支部会員の皆様も来年は是非ともご一緒しませんか？

ところで陸上自衛隊に「駆け付け警護」と云う新たな任務が付与されて、青森5連隊が南スーダンに派遣された報道はご存じかと思いますが、自衛隊員の体力検定に関する面白いメルマガが、今月も小川先生より届きましたので掲載致します。

## 「陸上自衛隊改造計画」がスタート

---

マスコミは南スーダンPKO(国連平和維持活動)などでの「駆け付け警護」の任務付与について大きく取り上げていますが、任務に従事する肝心の自衛官について気になる記事を見つけました。

「陸上自衛隊は今年度から、隊員が毎年受ける体力検定6種目のうち3種目を、実戦を想定した内容に変えた。『安全保障環境が厳しくなり、日本を防衛する際の戦闘行動に直結した検定が必要』というのが理由だ。約14万人の全隊員が対象で、迷彩服を着て臨む。

新しい3種目は、約50メートルをダッシュする『短距離疾走』、約1メートルの壕(ごう)を幅跳びで越える『超壕(ちょうごう)』、重さ約20キロのタンクを運ぶ『重量物の卸下(しゃか)、運搬、積載』。鉄帽と迷彩服を身につけ、小銃を抱えて受検する。陸自

練馬駐屯地(練馬区)で受けた田島寿弥(かずや)・陸士長(24)は『実戦ではこういった装具を身につける。身が引き締まる』と話した。

3種目は『戦技に直結する体力検定』と名付けられた。検定にはこのほか、従来通りTシャツなどの『体育服装』で臨む腕立て伏せ、腹筋、3千メートル走の3種目からなる『共通体力検定』がある。『戦技』の3種目が新設され、ソフトボール投げ、懸垂、走り幅跳びの3種目はなくなった。

新種目について、陸上幕僚監部教育訓練計画課の担当者は『体力を鍛えるだけでなく、頭に戦闘のイメージを植え付け、実戦で戦える隊員育成が必要。同様のテストは米軍や豪軍も実施している』と話す。一方で『あくまでも日本を防衛する場面を想定したもので、安全保障法制とは関係ない』と説明している。(福井悠介) (15日付け朝日新聞)

実を言えば、筋力を必要とする体力検定は、かなり前から姿を消していたのです。理由は、腰を痛めるおそれがあるというものです。

私が陸上自衛隊生徒教育隊(現在の高等工科学校)に入隊した1961年当時は、「体力測定」と呼んでいましたが、次の6種目で1級から級外まで評価が行われていました。

100メートル走、1500メートル走、土嚢(どのう)運搬、ソフトボール投擲、懸垂、走り幅跳び

このうち筋力を要するものは土嚢運搬で、重さ50キログラムの土嚢を担いで50メートルを走るというものです。

米俵を一回り小さくしたような外見でしたが、キャンパス地を機械で締め上げたロープには指が入る隙間もなく、やっと肩まで持ち上げたら後ろに落としてしまうという、始末の悪いものでした。

それでも、ひょいと担いで走って行く同期生がいたのですから、15歳の私としては驚き以外の何ものでもありませんでした。

むろん、土嚢運搬ができなかった私は級外。それ以外の種目は水準以上の成績だったので、いまに見ていると闘志を燃やしたものです。

継続は力なりといいますが、1年が経過して2年生になると楽々と土嚢を持ち上げて走れるようになり、3年生の時には50キロの土嚢をかついて50メートルを7秒あまりで走るようになっていました。

腰を痛めるから危険、といった話は聞いたことがありませんでした。

土嚢運搬は災害派遣に出動することが多い陸上自衛隊では当たり前だと思っていたのですが、あるとき海上自衛隊と航空自衛隊の生徒仲間と話していて、**海空の体力測定には土嚢運搬がないことを知りました。**

考えてみれば、当然かもしれません。災害派遣でシャベルやツルハシを振るう場面は、陸上自衛隊の専売特許のようなもので、**機械を操るのが主体の海空では必要ないと判断されていたのでしょう。**

それが、です。**数年前、陸上幕僚監部の人たちと教育訓練について話していたとき、陸上自衛隊でも土嚢運搬をやめていることが分かり、いささか考え込まざるを得ませんでした。**

今回の記事が伝える陸上自衛隊の動きは、土嚢運搬こそ復活していませんが、陸上自衛隊の**多様な任務に耐えられる身体能力を向上させようというもので、スポーツ医学的に検討される中で望ましい形になったのだと思います。**

陸上自衛隊においても**土嚢運搬が姿を消した動きは、日本社会の反映という面から考えなければなりません。**

日本の若者が送る**受験教育**の中で、体育会系はともかく、身体能力を一定水準に持っているのとは逆の方向が生まれていたことは間違いないからです。

そんなこともあり、今回の陸上自衛隊の身体能力強化の方向が、**一般社会の児童生徒の教育の中によい影響を及ぼしてくれればよい**と想ったりしています。

お断りしておきますが、**南スーダン**でPKOに従事する**隊員の身体能力は、体力検定に土嚢運搬があった時代と比べても水準の高いもの**ですから、ご心配なく。以上

私も昭和48年の入隊で当時の体重は60kg前後しかなく、50kgの土嚢が肩まで上がらず土嚢運搬には泣かされましたが、空挺選抜試験は体力検定3級以上が必須条件で漸くクリアし、習志野で鍛えられた3ヶ月後には1級になりましたから驚きです。

12/4新田原航空祭、来年1/7えびの駐屯地賀詞交換会と自衛隊行事が続きますので、多くの参加者をお待ち申し上げます。呉々もご自愛専一にお過ごし下さい。

平成28年12月1日

宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部長 小倉和彦